

三重で社会見学

私たちは、電気やガスなどのエネルギーや清らかな水、豊富な食料品などのおかげで、安心・安全に暮らすことができます。普段は何気なく利用しているものが、何を原料にして、どのように製造・供給されているか、実際に目にして理解を深めることは、意義のある体験といえるでしょう。

今回は、三重県内の火力発電所関連施設・環境学習の拠点施設、伝統的な醤油を作る工場、下水道を浄化するセン

ター、防災のための拠点施設、地域の先人たちの暮らしを展示する資料館をご紹介します。

いずれの施設も社会見学・体験を受け入れています。社会見学は、日々の暮らしを見つめ直すきっかけになることでしょう。

※各施設や周辺施設の社会見学体験などに関しては、実施期間受け入れ人数料金受け入れ方法などに違いがあり、状況に応じて延期・休止する場合があります。事前に必ずご確認ください。

取材・文……中村真由美・中村元美・堀口裕世・中川絵美子
撮影……梅川紀彦・尾之内孝昭・中村元美
ただし※印の写真は取材先から提供していただきました



親子で遊べる屋外施設「伊勢湾ジオランド」(手前)から
仰ぎ見る「川越電力館テラ46」

地球からの贈り物、限りある資源について学べる

川越電力館テラ46

〔三重郡川越町〕

巨大な地球儀のような外観が目を引く「川越電力館テラ46」は、限りあるエネルギー資源と生活との関わり方を学べる無料の施設です。同館スタッフの吉田さんの案内で館内に入った途端、宇宙船内に迷い込んだような感覚に。ワクワクしながら先へ進むと、地球46億年の歴史や自然を迫力ある映像でたどれる「ワンダーマシーン」、地球の未来を皆で考える「地球救出サミット」、大画面とタッチペンを使ってゲームに参加する



「ワンダーマシーン」



「地球救出サミット」※



「ハイパーシアター」



「ARクイズラリー」イベントでの
景品引き換えの様子※

「ハイパーシアター」などが次々と出現。年齢を問わず、飽きることなく、遊びながら学ぶことができます。子どもたちは夏休みの自由研究、大人は企業の新人研修などの利用も多いというのも頷けます。

最上階の展望室へ向かうと、なだらかな稜線を描く鈴鹿の山々や、川越町の家並みを一望できました。南に広がるのは、世界最大級の総出力約480万キロワットを誇る「川越火力発電所」です。

同館では、発電所見学も受け付けていて、個人向け(9名以下)の場合は、日曜祝日に「発電所探検ツアー」を実施。同発電所はLNG(液化天然ガス)を燃料として、LNG船が停泊する桟橋やタンクなども同時に見学可能です。迫力ある設備を間近にできるのは貴重な体験といえます。なお、団体向け(10名以上)に関しては、発電所の外周をバスで見学する「お手軽コース」に加えて、



「川越火力発電所」遠景※

お問い合わせ

株式会社JERA 川越電力館テラ46
(月・第3金曜日定休)
TEL 059-1363-6565

※印の写真は取材先から提供していただきました

ゲーム感覚で楽しめる見学や体験を通して、
環境への意識を高める

三重県

環境学習情報センター

【四日市市桜町】



自由に見学できる、展示ホール

「三重県環境学習情報センター」は、三重県の環境学習、環境情報発信の拠点として、平成11（1999）年に誕生した施設。以来、情報紙やメールマガジンの発行、「こどもエコクラブ事業」、「三重県地球温暖化防止啓発ポスターコンクール」、「環境学習地域リーダー養成講座」など、幅広い事業を行っています。

センター内は無料で見学（団体の場合は要予約）できるほか、10名から40名程度を対象にした多彩な環境学習プログラム（講師料・出張料は原則無料。1か月前までに要予約）を実施できると聞いて訪ねると、センター長の木村京子さん、副センター長の脇谷奈美さん、太田秀和さんが出迎えてく

れました。環境学習推進員でもある3人に話を伺うと、小学5年生以上が対象の「食品ロスをへらそう」、小学4年生以上の「買い物ゲーム」や「水質チェック」など、約12種類を用意しているとのこと。いずれも楽しみながら環境について学べるように工夫されていて、県内の小・中学校や市民団体に加えて、県外からも申し込みがあるといいます。

これらの中で、ゲーム感覚で学べると好評で、出前講座の申し込みも多いのが「買い物ゲーム」。模擬スーパーマーケットを設置して、5人分のカレーライスを作るた



「買い物ゲーム」用の模擬紙幣など



生活排水などの汚れが理解できる「水質チェック」※

めの材料や飲み物を買うという設定です。材料の野菜類や肉類はイラストをプリントしたのですが、トレイやビニール袋などは実物を使用しています。「最初はアドバイスしないで自由に買い物をしてもらいます」とのこと。すると、年齢に関係なく気にするのは値段で、どのグループが一番安く購入できたかを競い合って盛り上がるそうです。



「買い物ゲーム」で使用する模擬食材など

用を加えると、ほかのグループより合計金額が高くなる場合もあるそうです。「ゴミが増えることで埋め立て処分場の問題が発生したり、温暖化につながることを理解してもらいます」と3人。そこで皆で「エコバックを使う」「まとめて商品を含む」「包装の少ない品物を選ぶ」などのアイデアを出し合い、2回目の買い物を実施すると、どのグループも1回目よりゴミの数や処理費を少なくすることに成功するとのこと。「こうしたプログラム体験を通して、色々な視点があることや、環境への気付きをってもらうことが私たちの役割です」と話してくれました。

丁寧でわかりやすい3人の説明を伺ったセンター内には、明るく開放的な展示ホールが広がり、「地球温暖化」「森林」「水環境」「ごみ」「生物多様性」「四日市公害」の各コーナーで解説展示されています。また、入口近くにある「美しい伊勢湾を取り戻そう!」コーナーでは、伊勢湾に漂着したゴミの実物を展示しています。家族や友人と見学すれば、色々な気付きがあることでしょう

お問い合わせ

「三重県環境学習情報センター」
（祝日以外の月・土曜日定休）
TEL 059-329-2000

1回目の買い物を終えた時点で提示するのが「ごみ処理費計算シート」。材料を包装していたトレイやラップ、レジ袋などのゴミ処理費が簡単に計算できるようにしているため、購入料金が一番安かったグループが、ゴミ処理費



「こどもエコクラブ」でのエコ活動をまとめた壁新聞



企画展示風景
（2か月ごとに提示内容が変わります）



「美しい伊勢湾を取り戻そう!」コーナー



「三重県環境学習情報センター」外観

五感で体感する老舗の醤油造り 下津醤油株式会社

【津市一身田町】



大きなタンクが並ぶ工場内

津市一身田町は、高田山専修寺のお膝元。お寺を中心に民家や商店が広がっています。専修寺の山門前から数百メートル東にある「下津醤油株式会社」を訪ねると、駐車場に着いた瞬間から、直売所で焼くお団子の香ばしい醤油の香りが鼻をくすぐります。

工場内には、大きなタンクや機械類が立ち並び、それらを繋ぐように太いパイプが渡っています。「この中を、醤油の元となる醗が流れているんです」と説明してくださったのは、社長の

下津家が醤油を造り始めたのは幕末の安政3（1856）年。大正7（1918）年に株式会社となりました。「社長としては、私は8代目です」と浩嗣さん。伝統のある会社であっても、経営の苦労は多かったと言います。「平成10年に家業に戻ってから、『今のままではいけない』と、10年間は現場に張り付いて地道な作業を続けました。清掃や近代化に務め、社内で改善提案制度をつくって



伝統の味「キューボシ醤油」



社長の下津 浩嗣さん

従業員の意見を聞き、経費削減や生産性向上につながる小さな改革を、繰り返し繰り返し続けてきました」。設備やシステムの改革やISO取得などの取り組みを積み重ねた結果、全国醤油品評会では、最高賞である農林水産大臣賞を3度受賞するに至りました。

「醤油はもちろん自信の味ですが、もずくの調味液や納豆のたれ、炊き込みご飯用の調味液など、醤油を使った業務用の製品が売り上げの中心になってきました。食品業界の黒子のような役割ですね」。「下津醤油」という記載はなくても、ここで醸造された醤油は多様な形



温度調節ができるタンク



醤油を絞る工程



説明を聞く見学の子どもたち※



自作のラベルを描いて貼る※



直売所には多くの商品が並ぶ

を練り込んで生地を作ったかきんとうなど、もったいないと長年取り組んできた試みが、今、実を結んでいます。



色々な味のかりんとう

伝統と現代性が両立する醤油工場。驚きと楽しさがいっぱい。の工場見学です。

*工場見学には事前の申し込みが必要です。

お問い合わせ

「下津醤油株式会社」
（直売所／月・木曜日定休）
TEL 059-232-2121

子どもから大人まで防災について楽しく学ぶ

伊勢市防災センター

【伊勢市楠部町】



防災ゾーン。ワゴンを覗くと津波などの被害想定が分かる

地震、台風、火災…災害はいつ起こるか分かりません。日頃からの備えが大切ですが、なかなか「その時」をイメージしづらいもの。伊勢市の倉田山公園内にある「伊勢市防災センター」では、防災について子どもから大人まで体験を通して楽しく学ぶことができます。この

センターができたのは平成28（2016）年。南海トラフの津波被害を受けにくい地に、災害時の拠点にもなることを想定して建てられました。建物には伊勢市消防本部が併設されています。

3階の防災体験学習室は、誰でも気軽に訪れることができ、フロア内にある

所危機管理課の中上智司さん。映像を活用した消火体験装置によって、実際に叫んでから消火するまでの体験ができます。また隣にある避難ゾーンでは、実際の火災のように煙が充満した部屋の中を避難する体験ができます。「煙の怖さは、視界がなくなること。また一酸化炭素は無味無臭のため吸い込んでしまうから怖い。吸わないように低い姿勢で逃げるのが大切です」。暗闇の中を壁の感覚だけを頼りに歩くのは、体験だとわかっていても恐怖を感じました。

救出ゾーンでは、実際に三重県で起こったアンダーパス（交差する鉄道や道路な

どの下を通過する周辺の地面よりも低くなっている道路での車の水没事故の例を紹介しながら、水没した車から脱出を試みる体験ができます。実際に車に乗り込み、周囲が徐々に増水してだんだん車のドアが重く動かなくなる感覚が体験でき、車から脱出することの難しさを体感しました。また増水時歩行訓練機もあり、機械に乗りながら歩くと、増水によってだんだん足が重くなり、動きにくくなる感覚も体験できます。「子どもは35センチメートル、大人は70センチメートルで危険水域になるんですよ」と中上さん。またフロア内では、ゲーム感覚で1分

「防災」「映像」「消火」「避難」「救出」「救命」「備え」の7つのゾーンで職員の説明を受けながらさまざまな体験ができます（体験・見学は無料で要予約）。

体験時は、まずは映像ゾーンで、伊勢市の防災について学びます。大画面で過去の災害の映像を見ながらその恐ろしさを学び、避難指示の種類や伊勢市の避難場所の情報、また119番をしてから出動までを再現映像を通して知ることがができます。

防災ゾーンでは、床に配置された大きな伊勢市の地図の上を情報検索用のワゴン型装置（バードアイワゴン）を動かして覗きながら、市内各地の防災情報を見たり、伊勢市の地形の特徴を知ったりすることがができます。実際に自分の住む場所に津波が来たらどんな被害があるかなどが分かりやすくなっています。

次は消火ゾーンへ。「火事を発見したら『火事だ！』と大きな声で叫んで周囲に知らせる初動が大切です」と伊勢市役

以内に災害時の持ち出し品を選びながら備蓄について学習できるゾーンや、ロープの結び方、AEDの使い方や学べる場所もあります。

実際に体験することで、防災への備えの意識は確実に高まります。家族、グループ、職場など大切な人と一緒に、体験しながら防災に関する知識や技術を身につけ「もしも」の時に備える大切さを学んでみませんか。

お問い合わせ

「伊勢市防災センター」
（12月28日から翌年1月4日まで休館）
TEL 0596-12515719



映像ゾーン



消火体験



水没した車から脱出



増水時歩行訓練機



「伊勢市防災センター」外観

微生物により汚水がきれいになる仕組みを知る

公益財団法人三重県下水道公社

宮川浄化センター

〔伊勢市大湊町〕



下水処理施設。大量の微生物が汚水をきれいにする

三重県内で稼働する6か所の流域下水処理場の中で、一番南にある「宮川浄化センター」。業務は下水道の処理という維持管理で、伊勢市、明和町、玉城町を対象地域とし、平成18(2006)年6月から供用を開始し、順次整備が進められています。また下水道に関する普及啓発も行い、事業の振興を図っています。

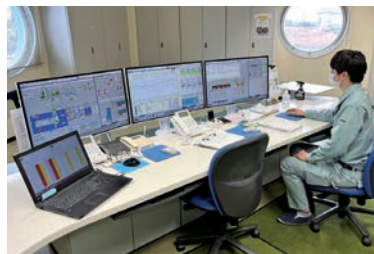
「下水は地下にあって目立たない施設ですが、なくてはならない事業として位置付けられています」と所長の中村高弘さん。日常生活を維持するために不可欠なエッセンシャルワーカーの一つで、普及啓発のために「下水道ポスターコンクール」を毎年開催し、優秀作品のポスター展示も行っています。見学の受け

か、その仕組みを解説してくれます。

「雨が降って川に流れ、その水が浄化されて水道水となって家庭に流れます。それを使うと下水道管を通じてここに辿り着きます。その水をきれいにして海に流せば、海の水が蒸発し、雨になります」と運転管理課長の須崎晃人(あきひと)さんが水の一生を話します。「浄化センターで伝えたいのは水の循環で、もう一点、水をきれいにするのは、薬品ではなく微生物だということ。この二つがポイントです。微生物が水の汚れを食べて活躍しているのですが、そのような活躍ができるように運転するのが、この施設な



紙質の違いが分かる実験



運転状況を管理する中央監視室



顕微鏡での微生物の観察※



近郊の小学生が多く訪れている※



施設は五十鈴川河口にある

んです」と中村所長。

見学では、まず管理棟でビデオの視聴と施設の紹介を受けます。トイレットペーパーとティッシュペーパーの紙質の違いが分かる簡単な実験もあり、中央監視室や水質試験室を見学し、大きな顕微鏡で微生物を観察します。次は水処理施設の場内を歩き、汚水が目に見えてきれいになっていく過程を見学。「集まってきた汚水をポンプで汲み上げ『最初沈殿池』で時間をかけて大きなゴミを沈めて取り除きます。次の施設、『生物反応層』へ送り、大量の微生物を含んだ『活性汚泥』が汚水の中の有機物、窒素やリンを

入れもその一環。小学校4年の授業で下水道について学ぶため、その年代が多く訪れています。また伊勢市との共催で夏休み親子見学会を毎年開催。「ここ数年は感染症対策により抽選となつていますが個人的な見学も引き受けていますので、抽選に漏れた方にも申し込みをいただいています。幼稚園の見学もあり、小さい時に下水道の存在を知っていただけると、その思い出は活きてきます。また、自治会など、大人の社会見学も歓迎です」と中村所長。

下水道管は地下20メートルに埋められているため、普段接することのない世界ですが、目印にマンホールがあります。近頃ではその絵柄が地域の文化や歴史を表し、話題になっていきます。家庭から出た生活用水が流れつく場所が浄化センターで、水を使った後、どのようにきれいになるの



優秀作品のポスター展示

吸収分解していきます」と須崎課長。そしてろ過されて消毒したのちに放流。さまざまな工程を経て、およそ1日かけて、五十鈴川河口に流されていきます。説明の中で、汚れを拭き取ったり、排水溝にネットをつけるなど、普段の生活で気を付けることを教えてくれました。水の循環について、一人ひとりが考えることができます。

お問い合わせ

「公益財団法人三重県下水道公社
宮川浄化センター」
(土・日・祝日は見学不可)
TEL 0596-13613841

歴史と生業や暮らしを知り、郷土を大切にすることを育む

紀伊長島郷土資料室

〔紀北町長島〕



3階の展示室。尾鷲ヒノキで仕切られたブース

平成29(2017)年、紀北町地域振興会館に移転オープンした「紀伊長島郷土資料室」。主として建物3階に、町指定の文化財など紀北町紀伊長島地区の資料が数多く展示され、町の歴史と人々が何を思い暮らしのかを、学ぶとすることができます。

元々は昭和56(1981)年、郷土の歴史を未来に活かすために貴重な資料を守り伝えようと元紀伊長島町松本に「紀伊長島郷土資料館」が建築されました。それから約50年の間に、計500種2万点を超える収蔵品が集まりました。

町民より寄贈、委託された民具や古文書、動植物標本をはじめ、文化財調査委員や有



漁業関係の道具が並ぶ

志によつて発掘された出土品など、貴重な歴史民俗資料を受け継ぎ、資料室にはその一部である132種がわかりやすい解説、パネルとともに並べられています。生業や暮らし、文化や水など、10のテーマに分かれ、それぞれのブースが尾鷲ヒノキによって囲われていて、落ち着いた雰囲気。この尾鷲ヒノキの生業も林業のブースで紹介されています。また古くから漁業が盛んな地域ということもあり、実際に漁で使われていた道具類が豊富。蛸(たこ)壺や浮き玉などのほか、船大工のノコギリ、また定置網の仕組みが分かる模型や真珠養殖で使用された秤(はかり)など、歴史をふ

まえ地域の産業について詳しく知ることができます。

資料室中央には昭和30年代の住居をイメージした部屋が設置され、湯たんぽや火鉢、黒電話などが、まるで懐かしい映画のワンシーンのようです。

一つひとつ、展示品をじっくり見て、パネルの解説を読めば、それぞれの時代の町の様子が描き出されます。

3階の入口スペースでは、年に4回、企画展が行われています。担当する主事の浅原 俊昭さんは「夏に必ず行っているのが戦争に関する企画展です。8月15日が終戦記念日ということもあり、また昭和20(1945)年5月14日の紀伊長島駅の空襲や、同年7月25日に三野瀬駅に停まっていた列車への機銃掃射など、この町にも戦争の爪痕があります。戦争を体験して

いるのは80代以上の人となり、今では知る機会も少なくなりま



浅原 俊昭主事



戦争に関する展示



2階図書室奥のパネル



国道沿いの紀北町地域振興会館にある

した。その事実を多くの人に伝えていこうと実施しています」と、収蔵品から「戦時下の郷土」や「軍歌」など毎年テーマを工夫しながら展開しています。

またコレクターからの寄贈品にも貴重なものがあります。企画展「マッチのラベル 明治・大正の商標コレクション」では、紀伊長島出身で明治初期から大正にかけて活躍した豪商・東茂七(ひがししち)さんの事業にちなみ、マッチのラベル約1100点を紹介しました。シカやカニ、ダルマに傘、偉人・軍人などさまざまな絵柄が施され、外国向けのものでは、それぞれの国で親しまれるようなデザイン

ンもみられたということです。

2階の図書室フロアの奥にもパネルが充実しています。全幅12メートルの迫力ある紀伊長島町の歴史年表、人口の統計や交通・熊野古道などの解説パネルに加え、三重県の航空写真を今昔で比較できるタッチパネルもあります。またクイズ形式でパネルを動かしたり触ったりと、幅広い年齢の人々が郷土の歴史を楽しく学べるようになっていきます。

お問い合わせ

「紀伊長島郷土資料室」

(月・祝日定休)

TEL 0597-4713906



昭和30年代をイメージ